

## 613 病室の誓い

「立派な看護師に…」私の手を握りながらそう言ったAさんのまっすぐな眼差しとその手の温もりを私は忘れることはありません。そしてこの大きな後悔も。

私は高校生の頃、アルバイトで看護助手をしていました。看護助手といっても医療に関する知識も技術も乏しい私に出来ることといえば清掃や他の看護助手さんの手伝いなど限られていて雑用ばかりでした。そんなある日、私がいつものようにシーツ交換をしようとシーツを両手に抱えリネン室を出ようとした時でした。「おーいおーい」と叫ぶ患者さんの声が聞こえたので私は一目散に 613 病室に向かいました。

「どうされました？大丈夫ですか？」「電気毛布の位置が低いわ」これが私とAさんの初めての会話でした。

この日から 613 病室に入院されたAさんは毎日、何回も「おい」と一声言うと私を手招きし病室に呼んでは「飯がまずいけえ食えん」「テレビの位置が悪いけえ見えん」「煎餅をとってくれえ、机が遠いんじゃ」と昨日と何も変わらないテレビや机の位置、私ではどうすることも出来ないご飯に文句を言い、決まって最後には「あんたは呼んどらん」と怒るのでした。

そんなAさんとの毎日を過ごすうちに私はだんだんAさんと距離をとるようになってきました。「あんたは呼んどらん」その言葉が私にはとてもきつく重たいものであり、心のどこかでAさんのことを苦手の対象にしていたのです。

それから2カ月。「おい」と呼ぶ声の先には、酸素をしながらベッドに横たわる手招きのないAさん。私は心の中でためらいながらもAさんのそばへ行き「どうされました？大丈夫ですか？」と声をかけた。するとAさんはまっすぐ私の顔を見つめ手を握りました。

「あんたは看護師になるんか？」「あ…はい」「看護師になったらまたここに帰ってきてくれえな。立派な看護師に…」そう言って微笑んだAさんは、この日の夕方息をひきとりました。

突然の出来事でよく状況を理解できていない私は、次の日Aさんの姿のない 613 病室でAさんにもう二度と会えないことを理解し、Aさんの面影の残る 613 病室から動くことが出来ませんでした。「Aさんは三上さんのことがお気に入りだったんよ“あの子はきっと良い看護師になってくれるとわしは信じとる”てずっと言ってたんよ。」「いつも三上さんが来るのを楽しみにまっていたんよ。」他の看護師さんからこの事を聞いたときはもう遅すぎました。私はAさんの言葉ばかりを真に受け本当に大切なAさんの心を見落としていたのです。Aさんを避け続けた自分、何も出来なかった自分。後悔だけが残りました。

私は今、看護学生です。Aさんの言う「立派な看護師」の正解像はわかりませんが、あの日 613 病室で誓った「患者さんの心に耳を傾けることの出来る看護師」を目指して頑張っています。

いつかAさんの認めてくれる「立派な看護師」になるので見守っててください。